

スポーツにおける「社会性」研究のための基礎的検討

—「社会性」の概念構築に向けて—

別府溝部学園短期大学 内 倉 康 二

A Brief Insight into “Sociality” in Sport —Towards the Conceptualization of “Sociality”—

Koji UCHIKURA

Beppu Mizobe Gakuen College

キーワード：社会性，運動部活動

Key Words: Sociality, Athletic Club Activity

はじめに

近年、若者におけるコミュニケーション能力の低下や、無気力な若者の増加が問題視されていることは周知の事実である。大学生においてもその例外ではなく、問題は多数存在している。牧ら（2011）は、道路いっばいに広がって歩く、通行の妨げになるような場所に自転車を停める、夜遅くに大声で騒ぐといったように規範意識の希薄化という問題を、社会規範・道徳規範に関する知識の問題ではなく、規範の捉え方の問題であるとしている。文部科学省高等教育局の報告（2000）においても、近年の大学生に関する問題が指摘されている。その中で、「今日の学生は、自由で豊かな時代を生きながら、他者とながりを希薄化させ、心の悩みに遭遇するなど、新しい問題に直面しているといえる」とまとめている。これに関連して谷島（2005）は、「大学への適応が困難な学生が増加しており、その原因として、学力面での困難と並んで、人間関係や社会生活において適応の困難な学生が多く見出される」と述べている。

以上を踏まえれば、今日の学生を取り巻く各種問題は、自らの立場をわきまえず自己本位な行動をとることや、他者とうまく関わるができないといったことであり、「社会性」の欠如であると言えよう。内倉・谷口（2011）は学生を取り巻く各種問題解決に運動部

活動が有用であるとの仮説から、大学生を対象とした質問紙調査結果を元に、「社会性」の因子構造とそれらの獲得状況について解明を試みた。当該研究によれば、大学生の「社会性」は、「協調性」「将来設計・自己向上」「自己主張」「課題対応」の4因子から構成されている。さらに、運動部活動所属学生の「社会性」獲得状況は他の学生に比べ有意に高いことが指摘されている。

しかしながら、上述の先行研究から得られた知見に対する異論の余地は明らかに存在する。内倉・谷口（2011）も指摘するとおり、「それぞれスポーツによって獲得される『社会性』は限定的な社会に留まるものである」可能性を有しており、高校運動部活動生による喫煙の問題や、運動部内における暴力の問題等といった非社会的な行動は後を絶たない。つまり、スポーツ競技者をめぐる「社会性」は内倉・谷口（2011）の研究における論考で十分に説明できているとは言えず、さらに多様かつ、深いものであると考えられよう。

そこで、本研究においては、スポーツ競技者における「社会性」をめぐる基礎的な検討作業を行い、その捉え方について整理し、今後の研究発展性について言及していくこととする。

1. 先行研究における「社会性」

「社会性」とは、その言葉どおり解釈すれば、「社会に向かおうとする性質」のことであり、換言すれば「社会に適応していこうとする性質」「社会の一員になろうとする性質」であると言える。これまでも「社会性」に関する先行研究は多数蓄積されており、その多くが心理学領域のものである。教育学における研究も散見されるが、社会学におけるものはさほど多くない。ここではまず、諸学問領域における「社会性」研究を整理し、その上で本研究における「社会性」概念について論じていきたい。

1) 心理学領域における「社会性」研究

上述したとおり心理学領域における「社会性」研究は多数存在する。秋光・村松（2011）は、「社会性」に関する研究の中で、戸ヶ崎・坂野（1997）の社会的スキル尺度を援用している。つまり、秋光・村松（2011）の研究において「社会性」は社会的スキルと同様のものとして取り扱われているのである。さらに、馬場・武藤（2010）の研究においては、岡田（2003）のソーシャルスキル尺度が「社会性」を測定するための尺度として用いられている。つまり、心理学領域においては「社会性」の意味が曖昧とされており、その他の概念と混同、あるいは置換えによる解釈がなされていると言える。しかし、当該研究において抽出された因子の内容からは一種の共通性も確認できる。すなわち、いずれの研究においても、「自己コントロール」や「自立」、「対人行動」といった鍵概念の抽出が見られ、社会の一員として機能するために必要だと考えられる性質を把握しているのである。

2) 教育学領域における「社会性」研究

教育学領域においては、「社会性」の定義やその重要性について多く論じられている。繁多（1991）は、「社会性」の最広義の定義として「その社会が支持する生活習慣、価値規範、行動基準などにそった行動がとれるという全般的な社会適応性」と述べ、最も狭い意味としては、「他者との円滑な対人関係を営むことができるという対人関係能力」を指すとしている。その他にも繁多（1991）の定義に類似するものが散見される（松永：2004、遠藤：2004）。また、鯨岡（2006）は、幼児の「社会性」について「目に見える社会性と早く身に付けさせようとして押し付けてしまうことは、社会性の育成にはならないとし、目に見えにくい『共にある』『共におれる』といった対人関係の基本の成り立ちこそが社会性の基盤である」と述べる。コミュニケーションは、そのやりとりが行われる社会的文脈

（政治、家族、教育、恋愛）ごとに全く異なる性質を帯びて現れるのであり、ある同一の行動であっても、その意味合いも違ってくるのである（長谷ら：2009）。

以上のことに鑑みると、教育学領域においては「社会性」について、ある行動ができる・できないといった点で論じられておらず、心理学領域と異なったアプローチの仕方であることがわかる。以下では、社会的なアプローチから「社会性」についてさらに議論を深めていきたい。

2. 本研究における「社会性」

社会は実に複雑であり、その中で行われるコミュニケーションのあり方も多様である。人々は社会の中で生活しており、規範やルールを遵守することを求められ、遵守できなければ社会から阻害されてしまう。また、それぞれ個人は社会の中で役割を有しており、その役割に適応することで社会の一員として機能することができるのである。ここでは、社会が個人に役割を付与し、規範やルールを呈示すると論じているE.デュルケム（1989）の理論を援用しつつ「社会性」について考えてみたい。

デュルケムは、社会は連帯的でなければ社会は成立し得ないとの立場から、発展した社会における連帯のあり方を説明している。発展した社会において、諸個人はそれぞれの特徴に見合った役割を分業という形で社会から付与され、その役割に赴いていくこととなる。分業により与えられた専門的な役割を全うしていくことによって、それぞれが孤立化していくこととなるが、それぞれの役割は互いに補完し合い、依存し合う関係にあるため、孤立化することはないとしている。また、分業による連帯を生む前提条件として、社会的規範、集合意識の存在を認めている。この社会的規範、集合意識は、未開社会における連帯を生む主要な要素であり、社会の発展に伴い、薄れて行くものの、残存していなければならないものとして指摘している。仮に完全に失われてしまったならば、社会は連帯的でなくなり諸個人は孤立化してしまうことも指摘しているのである。

ここで、「社会の一員になろうとする性質」である「社会性」について考えてみたい。デュルケムの理論に依れば、社会に存在する規範や集合意識、さらに社会から付与される役割に適応していこうとすることが「社会性」であると考えられる。適応するためには、規範や集合意識、役割を認識する必要があり、認識しようとすることも「社会性」の一部として捉えるべき

であろう。それらの認識がなされた上で、適応していこうと行爲することも当然「社会性」に含まれる。つまり「社会性」とは、「社会に存在する規範や集合意識、さらには社会から付与される役割を認識し、そのことに適応していこうとする性質」として把握していくべきものではなかろうか。すなわち、「社会性」は、役割や規範、集合意識を認識しようとする過程および、それらの認識を踏まえ、適応していこうと行爲する過程において看取することができると考えられる。

以下では、こうした「社会性」の理論枠組みをもとに、スポーツ競技者である、運動部所属学生の「社会性」に関して検討を加えていきたい。

方法

1. 対象者の選定

対象とする大学および対象者の選定は任意に行ったが、対象者の学年に関しては現在所属する運動部へと適応する過程を捉える目的から、部の幹部である大学3年生（調査当時）とした。なお、全ての対象者が野球部に所属している学生である。

インタビュー調査の概要は以下のとおりである（表1）。

2. インタビューについて

運動部所属者の部内、ならびにその他の場面における行爲のみでなく、行爲に至るまでの経緯を詳細に把握する目的からナラティブ・インタビュー法を用いた。ナラティブ・インタビュー法では、対象者に研究上関心のある経験領域に焦点を絞った質問をし、自由に物語を語ってもらう。その後、十分詳しく述べられなかった語りの断片や曖昧な部分に対して別の質問を

向けるという作業を繰り返し、インタビューを通して対象者に一貫した物語を語ってもらった。

3. 分析方法

分析および考察に際しては、上述した「社会性」の捉え方をもとにインタビューデータを解釈し、対象者の「社会性」の発揮場面に関して抽出されたデータを用いながら説明を加えるという方法をとった。

結果と考察

運動部所属学生の「社会性」を把握する目的から、運動部（野球部）に所属する学生5名に対してインタビュー調査を実施した。なお、対象者5名ともレギュラーであり、部内では中心となる人物である。

1. 運動部内に存在する規範の認識と適応

運動部所属学生（以下、部員）は、部内に存在する規範を認識し、それを受けていかに行爲すれば適応へ向かうかを思考していることがわかった。

『敬語を使うとか、挨拶をするとか。あと集団行動ができたり時間を守れるっていうのは、基本じゃないですかね。「それができてから」って思っているんで。どこにいても一緒だと思います。やっぱり敬語を使わなかったりしたら怒られる。違うことをしていたら怒られるじゃないですか。敬語を使わなかったら怒られるんで、これ（敬語を使わないことは）違うぞって感じます』（対象者E、括弧内は筆者による、以下同様）。

『野球部って独特のコミュニケーションがあると思うんですけど、最初はそれが苦手でしたね。それに慣れたのが高2の秋ぐらいだったと思いま

表1 インタビュー調査の概要

対象者	所属	年齢	学年	役職, ポジション	期 日	調査場所	所要時間
Aさん	国立 A大学	21	3年	主将, 二塁手	2012.3.10	K市内喫茶店	60分
過去の経歴：ほとんど一回戦負け（中学）、県内で優勝、準優勝（高校）							
Bさん	国立 A大学	21	3年	投手	2012.3.10	K市内喫茶店	60分
過去の経歴：市内15校中3位（中学）、専門的な指導は受けなかった（高校）							
Cさん	国立 B大学	21	3年	主務, 中堅手	2012.3.13	O市内喫茶店	60分
過去の経歴：地区大会では優勝するが、県予選は勝てない（中学）、22年連続初戦敗退（高校）							
Dさん	私立 C大学	21	3年	主将, 一塁手	2012.3.16	B市内喫茶店	90分
過去の経歴：クラブチームに所属（中学）、甲子園出場（高校）							
Eさん	私立 C大学	21	3年	中堅手	2012.3.16	B市内喫茶店	90分
過去の経歴：九州地区3位（中学）、県内で中堅レベル（高校）							

す。真面目だけじゃないおふざけの関係。そういう関係もあるんだなって思いました。それまでは意地を張っていたっていうか、人に否定されることを嫌がっていた部分があったんですけど、それを一回受け入れてみようかな、やり過ぎしてみようかなっていう風に思って』(対象者B)。

部員は部内に存在する規範を認識し、自らがどのように行為すべきであるのかを判断していることがわかる。対象者Eの場合、他者から指摘を受けることによって、自身が規範に適応できていないことが認識され、自らの行為を変容させることによって、適応していくこととなった経緯を看取することができる。また、対象者Bの場合は、部内における独特の対人関係のあり方を認識し、その中で自らがどのように行為する必要があるのかを思考している様子が窺える。「意地を張っていた」と言うように部内に存在する規範に対して抵抗を持っていたものの、自らの考えを変革することによって規範に適応していったと捉えられよう。このように自らの欲求を抑制し、社会の中に存在する規範に適応していこうとすることは本研究でいうところの「社会性」のあらわれであると言えよう。

また、部内に存在する規範の持つ意味について興味深いコメントがあった。

『ルールがないと、チームが成り立たないのかな。ルールがあるから安心っていう。上下関係に関して言えば、(ルールが)なかったらどう先輩と接していいのかわからない。なんて言うんですかね。自分の行動基準を作る上でルールっていうのは重要なんじゃないかなと思います』(対象者B)。

この回答内容から部内における規範は、自らがいかに行うべきであるかの判断材料となっていることがわかる。今日の日本について加藤(2009)は、「伝統的な暗黙のルールが無くなってしまい、無規範社会になっている」と指摘している。また土井(2009)は「多様な生き方が認められるようになり、社会の側に価値に対する普遍的な物差しがなくなってしまう」と指摘する。両者が指摘するように、今日の社会では規範が無くなりつつあり、それぞれが欲求のままに行動するようになってきているのである。しかしながら、運動部内においては、われわれが失ってきたと指摘されている上下関係をはじめとした多数の規範が色

濃く残っており、個人の欲求を抑制することができていると言えよう。

2. 運動部内における役割の認識と適応

部内においてはポジション、主将や副主将といった様々な役割が存在しており、そのことを諸個人は認識し、社会の一員として機能するために、役割に適応しようとしていることが確認された。その様相を示す特徴的な回答を紹介したい。

『はっきり言うと、キャプテンっていう役職には就きたくなかった。できれば避けたかったです。キャプテンになって最初のリーグ戦はまとめられていなかったですね。自分は結果で引っ張ってあげればいかなって考えていたんですけど。(中略)シーズン終了前ぐらいからは、結果を出しつつ、まとめていかなければならないっていう意識になりました。それまではあまり気にしていなかったんですけど、しっかり声を出したり、集合の時に綺麗な円になるようにしたり、そんなことを意識するようになりました』(対象者A)。

上記回答から、部員は社会から付与された役割を認識し、自身の中で役割に適応しようと行為を選択していることが窺える。また、付与された役割が望むものでなかった場合においても、自らの欲求を抑制し、付与された役割に適応しようとしていると言えよう。さらには他者との関係、部内における変化をもとに自らが役割に適応しているか否かを認識していることも看取できる。うまく適応できていなかった場合、それまでの自身の考えを抑制し、さらに思考を巡らすことで、適応する方法を模索していると言えよう。この適応過程に関して、特徴的なコメントを紹介したい。

『求められていることを感じ取って、自分のなかでどうやっていくか、どの方向に進んでいくかっていうのを自分で考えてって感じです。それでやってみて、周りの反応を見て、これは違うとか合っているとかって調整してって感じですかね』(対象者C)。

上記対象者のコメントから、部員は自らの行為に対する周囲の反応を捉えながら、絶えず役割への適応状態を把握し、適応するための手段を模索していると言える。このことは本研究において仮定していなかったものの、「人々はさまざまな集団を形成し、その集団

を通して相互の人間関係をはかりながら行動している」と述べる福田(1998)の論考に符合し、次のように考察できる。すなわち、部員は迷いながらも、試行錯誤のなかで自らの行為を評価・修正することで適応へと向かっているのである。この迷いのなかにある状態を捉え、「社会性」を有していないと判断することは、尚早なのではなかろうか。これまで「社会性」に関して心理学領域を中心としておこなわれてきた研究の多くが採用した尺度を用いた方法では、ある特定の段階での適応状態を測定することしかできず、迷いのなかにあることは不適応状態として「社会性」を有していないものとして扱われている。しかしながら、実は、この迷いのなかの試行錯誤こそは、状況に鑑みて「自らがどのように行為すべきか考え行動する力」であり、「社会性」をあらわしているのである。

まとめ

本研究では、社会から個人に付与される規範や集合意識、役割の存在を前提とし、そのことへと適応していくことを「社会性」として議論を深め、スポーツ競技者をめぐる「社会性」について検討してきた。その中で、これまで他の学問領域において検討されてきたものとは異なる形で「社会性」の把握がなされた。部員は、部内における規範や集合意識、役割を認識し、また認識の正確さを他者との関係の中で確認していることがわかった。運動部において各人は、適応しようと絶えず試行錯誤を繰り返しており、部の一員として機能しようと試みているのである。部内における規範や集合意識は部を構成する人々に共通のものであるが、役割は個人によって異なり、そこへの適応の仕方も実に様々である。その点に関して本稿で論じるだけのものを持ち合わせていないが、今後の研究継続においてはさらに詳細に把握していく必要があるだろう。また、「社会性」はさらに複数の要素を持ち合わせている可能性も有している。そのことは、以下の対象者のコメントから窺える。

『大学2年のときに1年の指導係を任されたんですよ。でも、自分はあまりできなかったですよ。笑っちゃうんですよ。集めてちゃんと真面目に話をして、怒ったりしようとするんですけどね。はまっていないっていう感じでした。でも、終わりがあるというか、最後らへんは「まあいっか、もう終わるし」みたいな感じでした。』(対象者E)。

上記コメントは、社会より付与された役割を認識し適応していこうとする点において明らかに「社会性」があらわれていると言える。しかしながら最終的には、いわば諦めといった形で役割を放棄しているのである。この役割の放棄は、その後3年生になることによってそれまで適応しなければならない役割から離れることがわかっており、時間的展望を持った上でなされている。このことは、部活動という時間的制約を有している環境における特徴的なものであると考えられるが、社会への適応を考える際、時間的要素への配慮が欠かせないことを示唆しているとも考えられよう。「社会性」と時間的要素の関連性に関しても今後の研究継続上の課題としておきたい。

今後、より詳細にスポーツにおける「社会性」の解明を目指したとき、上述した他、集団内における規範が個人を抑制する強さと集団の凝集性の関連、さらには個人の有する集団に対する愛着と適応の程度の関連やスポーツ種目の違いによる特徴等、様々な面からのアプローチが可能となるのではなかろうか。

(附記)

本研究の実施にあたり、インタビューに協力いただいた学生諸氏に対し、深甚なる謝意を表す。また、本研究は平成23年度九州地区大学体育連合による研究助成を受けて行われたものである。

文 献

- 1) 秋光恵子, 村松好子: 父親の関わりが児童期の社会性に及ぼす影響. 兵庫教育大学研究紀要 38: 51-61, 2011.
- 2) 馬場広充, 武藤博文: 学校教師が記入する社会性チェックリストの課題. 日本教育心理学会総会発表論文集 52: 550, 2010.
- 3) 土井隆義: キャラ化する／される子どもたち 排除型社会における新たな人間像. 岩波書店, 2009.
- 4) E. デュルケム: 社会分業論 (上, 下). 井伊玄太郎訳・講談社学術文庫, 1989.
- 5) 遠藤利彦: 子どもに育てたい社会性とは何か. 児童心理 58巻2号: 145-153, 2004.
- 6) 福田市朗: 模擬社会における個人と社会の関係について. 経営情報研究 摂南大学経営情報学部論集 第6巻第1号: 73-90, 1998.
- 7) 繁多進: 社会性の発達とは. 繁多進, 青柳肇, 田島信元, 矢澤圭介編『社会性の発達心理学』. 福村出版, pp.9-16, 1991.

- 8) 長谷正人, 奥村隆 編：コミュニケーションの社会学. 有斐閣アルマ, pp68-107, 2009.
- 9) 加藤諦三：非社会性の心理学 — なぜ日本人は壊れたのか. 角川書店, 2009.
- 10) 鯨岡峻：保育雑感 幼児の社会性とは何か. 幼児の教育 105巻4号：4-7, 2006.
- 11) 牧亮太, 宮木景子, 湯澤正通：大学生の約束意識と規範的態度. 広島大学心理学研究 第10号：81-88, 2011.
- 12) 松永あけみ：子どもの社会性はどう発達するのか. 児童心理 58巻2号：145-153, 2004.
- 13) 文部科学省高等教育局医学教育課：報告書「大学における学生生活の充実について — 学生の立場に立った大学づくりを目指して — 」, 2000.
- 14) 谷島弘仁：大学生における大学への適応に関する検討. 『人間科学研究』文教大学人間科学部 第27号：19-27, 2005.
- 15) 戸ヶ崎泰子, 坂野雄二：母親の養育態度が小学生の社会的スキルと学校適応におよぼす影響 — 積極的拒否型の養育態度の観点から — . 教育心理学研究 45 (2)：173-182, 1997.
- 16) 内倉康二, 谷口勇一：大学運動部活動参加と学生の社会性および生活充実度の関係. 体育・スポーツ教育研究 第11巻第1号：5-13, 2011.

(平成24年7月18日受付)
(平成25年9月9日受理)